

# 言語行動の発達 (I)

—2 から 17 か月児の時間標本法による観察資料の  
分析 (擬似縦断法)—

教育心理学研究室 大浜幾久子・荻野美佐子・斉藤こずゑ  
武井 澄江・辰野 俊子

## The Development of Verbal Behavior (I)

Analysis of observational data collected by time-sampling method:  
A quasi-longitudinal study of infants from 2 to 17 months old.

Kikuko OHAMA, Misako OGINO, Kozue SAITO  
Sumie TAKEI and Toshiko TATSUNO

Our main premise concerning language acquisition is that the major organizing features of formal language i.e. syntax, semantics, pragmatics and phonology, have important precursors and prerequisites in the prespeech communicative acts of infants. We are undertaking a follow up observational study of children from 2 to 24 months old with their mothers. The aims of this study are to clarify the transition from prespeech communication to early language and to show how dependent the development of verbal behavior is upon the nature of the interaction which takes place between mother and child from the early months.

The present paper is our first report of this longitudinal study. We analyzed part of our quasi-longitudinal data collected by 161 fortnightly home visits (8 children from 2 to 5 months old; 4 children from 6 to 11 months old; 4 children from 12 to 17 months old). These were time-sampled data of children's behavior (perceptual, language-vocalization, communicative, physical, etc.) and mothers' behavior (caretaking, emotional, playing, language, etc.) of which frequencies and correlations were calculated every two months. The developmental changes of these behavior, especially those of communicative and verbal behavior were discussed.

- I. 問題
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察
- V. 今後の課題

### I. 問題

1960年代に言語学に新しい視点をもたらした Choms-

ky, N. が、「言語習得の研究は言語の一般的性質の理解のために重要である」と主張したことの影響もあって、過去10数年間に、数多くの言語習得の研究、特に統語能力の発達に関する研究がなされてきた。その一方では、言語習得のメカニズムを明らかにするためには、言語習得以前の段階の研究が不可欠であることが次第に強調されるようになってきた。特に、言語習得の過程を、前言語期の伝達から、言語による伝達への移行としてとらえる研究が試みられてきている。(Bates et al. (1976),

Bruner (1975a) (1975b) (1978), Dore (1975), Macnamara (1977), Moerk (1977))

「言語習得理論」の目標は、言語（例えば日本語）の統語的・意味論的及びプラグマティクス・音韻の各側面が、前言語期の子ども伝達行動のどの側面と、どのような連続性をもつかを明らかにすることにあると見てよいであろう。ところで、このような立場に立って研究をすすめるためには、乳幼児の発達をその養育者（特に母親）との相互作用の中でとらえることが必要になる。(Clarke-Stewart (1973), Lewis et al. (1974) (1977), Snow (1977)) なぜなら、第一に、子どもがある言語を母国語として獲得するためには、その言語のモデルが不可欠であるが、そのモデルのインプットの役割を担うのは母親だからである。第二に、伝達が成立するためには送り手と受け手が必要であり、母子は互いにその両者の役割を様々な形で頻繁に果たしているはずである。第三に、母親は子どもにとっての物の世界を大きく規定することが予想される。即ち、子どもに物を見るように仕向けたり、物を持たせたり、使い方を教えたりするのは母親である。以上のようなことが予想されるが、家庭で母親が実際にどのような相互作用をしているのか、その実態を明らかにするための資料はまだ数少ない。特に、言語行動の成立の研究のための縦断的観察研究は不十分である。

我々の研究は、以上に述べたような視点に立ち、単に音声面に限らず、言語習得にかかわると予想される諸側面（視線・表情・手腕による伝達・物とのかかわり・身体の運動機能、及び母親の行動）を縦断的に観察するものである。本論文はその第一報である。分析するのは、擬似縦断法による2か月から17か月までの子どもとその母親の行動の観察のうち、時間標本法によるものである。今回の分析は、伝達行動を中心に子どもの発達の変化を記述することを目的とする。さらに、幾つかの問題を考察し、次の分析への仮説を導く。

## II. 方 法

### A. 観察対象及び期間

男女児各4名、計8名（第1グループ）を生後2か月ないし3か月から24か月になるまで、さらに6か月児男女各2名（第2グループ）及び12か月児男女各2名（第3グループ）の計8名については、それぞれ6か月間にわたって、どのケースも隔週1回、家庭での観察をする。

被験児は、東京都内またはその近郊に在住し、第一子

であること、主に母親が育児をしている（フルタイムの職に就いていない）こと、正常分娩で生まれたもので、母親が、研究目的が「ことばの発達」であること、その他の条件を承知して協力を申し出たものである。母親は高校または大学卒の学歴をもち、訪問開始時に、23歳から32歳であった。

### B. 観察方法

#### 1. 場面

観察は、隔週に1回、原則として、同一の曜日、時間（午前9:30または10:00あるいは午後1:00から2:30の間に開始）に各被験児の家庭を訪問して行う。訪問者は、観察者2名、VTR撮影者1名の3名（女性）である（観察者がVTR撮影者を兼ねるケースもある）。1回の訪問は約2時間であるが、記録を採る時間は、10分単位（セッション）を最大7回であり、各セッションの間には約5分間の休憩をおく。7セッションのうち、6セッションは自由場面であり、原則として最終の1セッションをゆるい統制場面とする。

#### a. 自由場面

前もって母親に、観察者の目的が、子どもの日常の家庭生活の様子を観ることにあること、さらに、普段の通りに振るまわってほしいことを理解してもらう。

#### b. 統制場面

毎回、次のおもちゃ類を用いて、母親に子どもと遊んでもらう。〔人形(男・女)・ウサギぬいぐるみ・イス(ビニール製・押すとなく)・自動車(ぜんまいで向きをかえながら走る)・歯ブラシ(幼児用)・鏡とブラシ(ビニールケース入り)・旅行用化粧品入れ(ビニール及びプラスチック製でふたつき)・ガラガラとニギニギ(ビニール袋入り)・コップ・皿・茶わん・はし・スプーン・積木(16個)・棒(2本)〕母親には次のような教示を前もってしておく。「最後の約10分間は、こちらで用意したおもちゃ類を使って、お子様と一緒に遊んでいただきます。おもちゃの中には、お子様の年齢にふさわしくないものも含まれていると思いますが、お母様が適当と思われるものを選んでさしあげてください。」

#### 2. 記録

各セッションの母子(時には、父、伯叔父母、祖父母、従兄弟姉などが加わることもある)の行動は、ふたりの観察者が次の2方法で記録する。

#### a. チェックリスト法

表1に示した105項目からなるチェックリストを用いる。観察者は、15秒毎に、その時点で観察される母子の行動のうちあらかじめ定義された項目に該当するものを

表 1. チェックリスト項目 (M: 母親, F: 母親以外の養育者・同居者)

子ども	
[視線]	
1 <睡眠>	ねむっている。
2 <閉眼>	まぶたを閉じ何も見ていない。まどろみ, 半眼を含む。
3 <開眼>	覚醒で 4~19 につけられないもの (対象が不明確)。
4 <注視・人(M)>	M を見る。
5 <注視・人(F)>	F を見る。
6 <注視・人(O)>	観察者を見る。
7 <注視・人(/)>	4~6 以外の人を見る。
8 <注視・人(S)>	自分の身体の一部を見る。自分の手を見るなど。
9 <注視・物(O)>	自分のもっている, 操作している物を見る。
10 <注視・物(M)>	M が呈示を意図せずにもっている物を見る。
11 <注視・物(/)>	9, 10 以外の物を見る。
12 <追視・人(M)> 13 <追視・人(F)> 14 <追視・人(O)> 15 <追視・人(/)> 16 <追視・人(S)>	以上それぞれの対象が動いている場合で, <注視・人>に準ずる。
17 <追視・物(O)> 18 <追視・物(M)> 19 <追視・物(/)>	以上それぞれの対象が動いている場合で, <注視・物>に準ずる。
[口]	
20 <飲食>	乳・ジュースを飲む, 固型食・菓子を食べるなど。
21 <指吸う>	指・手を吸う, なめる, かむなど。
22 <以外吸う>	食べられない物を吸う, なめる, かむなど。
23 <以外吸う(O)>	自分のもっている食べられない物を吸う, なめる, かむ。
[発声]	
24 <泣き>	声をたてて泣く。
25 <むずかり>	不快な声を出す。
26 <喃語>	非叫喚音からなる一連の音声, 意図の不明瞭な発声。
27 <原初語>	日本語にはなっていないが, 伝達意図の明瞭な発声。
28 <言語>	“マンマ” “パパ” など日本語らしい形をもち, 一貫した使用傾向の認められるもの。 幼児語も含む。
* 24, 25, 27, 28 については, 原因, 対象が明白な場合は, その「人」「物」の別をつける。	
[顔] (頭部の動きを含む)	
29 <微笑>	ほほえむ。
30 <笑い声>	声をたてて笑う。
31 <不快>	泣き顔, 怒りなど表情による不快の表出。
32 <受容>	うなづくなどの受容, 承認の表出。
33 <拒否>	いやいや (首ふり), 顔をそむけるなど拒否の表出。
* 29~33 の原因, 対象が明白な場合は, その「人」「物」の別をつける。	
[手・腕による伝達]	
34 <指さし>	人さし指の完全な独立はなくとも指示の明白なものは含む。
35 <だっこせがみ>	手をさしのべてだっこをせがむ。
36 <拒否>	払いのける, 押し返す, たたくなど手・腕による拒否。
37 <その他>	34~36 以外の手・腕による伝達 (もののうけわたしなど)。
[手・腕の活動]	
38 <つかむ・人(M)>	M をつかむ, さわる, M の手をもつなど。
39 <つかむ・人(F)>	F をつかむ, さわる, F の手をもつなど。

(続く)

表 1. チェックリスト項目 (続き)

40 <つかむ・人(/)>	38, 39 以外の人をつかむ, さわる, 手をもつなど。
41 <つかむ・人(R)>	手をのばして人をさわったりつかもうとしたりする (reaching)。
42 <つかむ・人(S)>	自分の身体の一部をつかむ, さわる (単に物理的にふれているだけのものは除く)。
43 <つかむ・物(/)>	物をつかむ, さわる, もつ。
44 <つかむ・物(R)>	手をのばして物をさわったりつかもうとしたりする。
45 <その他・人(M)>	M に対するたたくなどつかむ, さわる以外の手・腕の活動。
46 <その他・人(F)>	F に対するたたくなどつかむ, さわる以外の手・腕の活動。
47 <その他・人(/)>	45, 46 以外の人に対するたたくなどつかむ, さわる以外の手・腕の活動。
48 <その他・人(S)>	自分の身体の一部を使っての活動 (手をたたく, オツムテンテンなど)。
49 <その他・物>	物に対する操作 (まわす, ふる, つむ, 投げるなど)。
[全身一移動] (位置の移動のあるもの)	
50 <歩行>	歩いて移動する, つたい歩きも含む。
51 <歩行(H)>	歩行器などにより移動する。
52 <ハイハイ>	ハイハイによって移動する。いざり這いなども含む。
53 <ねがえり>	ねがえりにより位置をかえる。
54 <養育者による移動>	M, F にだかれたり, おぶわれたりして移動する。
[全身一停止] (位置の移動のないもの)	
55 <静止>	じっとしている。
56 <身をねじる>	不自然な体勢で特定の方向に頭, 上半身を向ける (首を曲げる, ふり向く, 頭をもち上げる, かがむなど)。
57 <手か足動く>	四肢の部分的動きのあるもの。
58 <活動的>	四肢を激しく動かす。全体的動きのあるもの。
[姿勢]	
59 <立つ>	つかまり立ちも含む。
60 <立つ(H)>	歩行器により立っているもの。
61 <四つんばい>	四肢により身体を支える。
62 <坐る>	椅子にすわるものも含む。
63 <あおむけ>	背中を下にする。
64 <うつぶせ>	腹を下にする。
65 <養育者による>	59, 61~64 において, M, F などにより, その姿勢が保たれているもの。
養育者 (母親)	
[養育行動]	
66 <食事>	授乳, 離乳食を与えるなど。
67 <排泄>	おむつかえ, トイレット・トレーニング。
68 <衣服>	衣服の着脱をする。
69 <沐浴>	風呂に入れる。
70 <睡眠>	ねかせるための諸行動。
71 <その他養育>	汗ふき, 爪きり, 赤ちゃん体操など 66~70 以外のもの。
72 <訓練補助>	66~71 に伴う訓練, 補助 (さじを使わせる, 歩行訓練など)。
73 <養育ことばかけ>	66~71 に伴うことばかけ。
[愛情行動]	
74 <注視>	子どもを見つめる, 追視する, 子どもの方を見る。
75 <傾聴>	子どものいうことを一生懸命ききとろうとする。
76 <ほほえみかけ>	子どもにほほえみかける, 笑う。

(続く)

表 1. チェックリスト項目 (続き)

77 <接触>	子どものからだにふれる (軽くたたく、頭をなでる、手をもつ、からだを支えるなど)。
78 <おんぶだっこ>	子どもをだく、おぶう、ひざにのせる。
79 <だきしめ>	強くだきしめる。
80 <肯定非言語>	動作により受容、承認、賞讃を示す (手をたたく、うなづくなど)。
81 <否定非言語>	動作により禁止を示す、叱る (たたく、とりあげるなど)。
82 <愛情ことばかけ>	74~81 に伴うことばかけ。
[遊び行動]	
83 <手ぬき>	子どもを無視して家事などをする。子どもを見ない。
84 <傍観>	子どもが遊んでいるのを見守る。
85 <消極的誘導>	遊び全体の方向づけを与えるのみ (おもちゃを示す、おもちゃを渡すなど)。
86 <積極的誘導>	遊びの方向性を具体的に示す。物を使う場合は、物の機能に即した指示を行なう (ガラガラをふってみせる、体操をしてみせるなど)。
87 <誘導・物>	85, 86 において、物を用いた誘導をしているもの。
88 <参加>	子どもと一緒に遊ぶ。特に母子が同等の立場で遊びに関与しているもの (ボールのころがしっこ、もののやりとり、ままごとなど)。
89 <遊びことばかけ>	83~88 に伴うことばかけ。
[ことばかけ] (73, 82, 89 のことばかけの内容)	
90 <肯定言語>	受容、承認、賞讃を示す (“お上手お上手” など)。不快状態をなだめるあやしことば (“ハイハイ” “ヨシヨシ” など)。
91 <否定言語>	禁止、叱責を示すことば (“ダメ!” “~しないの” など)。
92 <行動喚起>	よびかけ、質問、指示、要求 (“○○ちゃん!”, “ホラホラ” “何ほしいの?” “~してごらん” など)。
93 <説明・ini>	M が自発的に事物、場面の説明をする、理由づけをする (“お人形さんが遊びましょって” など)。
94 <説明・応答>	子どもの説明要求行動、発声に対して答える。
95 <訓練・ini>	モデルを示す、訂正、名前づけなどことばを教えることを意図してなされるもの (“マンマ、これマンマね” など)。
96 <訓練・応答>	子どもの発声、発語に対する模倣 (子どもの “アーアー” に対して “アーアー” と答える)。
97 <絵本>	絵本、本に書いてある通りによんできかせる。
98 <ことばあそび>	イナイナイバー、しりとりなどことばによる遊び。慣習的なもの (“チョチチョチ” など)。
99 <歌>	子どもと一緒に歌を歌う。歌ってきかせる (歌詞がはっきりききとれるもの)。
100 <Lull>	メロディーを口ずさむ、ハミングする (歌詞のないもの、不明瞭なもの、リズムだけで示されるもの)。
101 <ひとりごと、他人>	子どもの反応を期待しない発語。自分自身に向かって、及び他の人に向かってのもの。
[距離]	
102 <接触>	子どもの身体の一部と物理的な接触が保たれる距離。
103 <腕とどく>	少し動けば、子どもの身体にふれうる距離。
104 <視野内>	視線による交渉が可能な距離。
105 <視野外>	別室など、視線による交渉ができない距離。
* 102, 103, 104 をまとめて (母親在) とする。	

注) 同一行動カテゴリ内 (線で区切ったもの) においては、[手・腕の活動][愛情行動]、項目の中に注記されたもの (65, 72, 73, 87, 89) 及び一部の例外を除いては各項目は背反的であり、原則としてひとつの行動カテゴリに2箇所以上のチェックは認めない。

チェックしていく。このチェックリストは、母子の同時点での行動の様相を量的に分析できるよう、子どもに関しては、視線・発声・伝達・活動・姿勢に関する項目を中心とし、養育者（母親）に関しては、場面（いわゆる養育行動・愛情行動・遊び行動）と場面ごとのことばかけの有無、その内容、子どもとの身体的距離を中心とした項目を選んだ。なお、養育者の項目にはすべて、I（母親）、F（母親以外の養育者・同居者）、K（IとFとが重なる時）の3種のチェックの可能性がある。

#### b. エピソード筆記記録法

チェックリストと同様、15秒毎の合図に従って、母子の動作（行動）、ことば、発声を、特にその相互関係をもたさないように留意して記録する。記録用紙は、各15秒間の行動記録が、母子別に、そしてその相互交渉が書きあらわされるように区切られている。

上記の2方法による記録は、VTR録画により、観察終了後、補完され、より綿密で精度の高いものとなる。なお、録画の際、15秒毎の合図を同時記録しておく。

### C. 補助資料（発達質問紙）

上記の観察に加えて、4週間毎に、発達質問紙への回答を母親に依頼する。これは、子どもに関する次のような項目について、母親の観察を調べることになる。

- (1) 人の認知（例：知らない人が来ると、じっと顔を見つめて表情がかわりますか）
- (2) 物の認知（例：物を落として、落ちた場所をのぞきますか）
- (3) 調音機能（例：ストローで牛乳やジュースが飲めますか）
- (4) 音・声の認知（例：物音がするとその方向をふり向きますか）
- (5) 伝達（例：行きたい方向を指さしますか）

以上の他、一日の生活時間のあらまし、母親以外の家族との係りあいについても記入してもらう。

この発達質問紙は、津守ほかの「乳幼児精神発達診断法」及び、若葉・飯高ほかの「発達質問紙試案」を参考にして作製した。

### D. 分析資料

#### 1. 分析資料の構成

以下、本論文で分析するのは、上述の方法で得られた資料のうち、161訪問分（詳細は表2参照）のチェックリストである。この訪問は1977年11月上旬から1978年8月上旬の間に実施された。

表2からわかるように、今回の分析資料は、月齢2か

表2. 分析資料の構成

月齢グループ	被験児	訪問回数
2・3か月	第1グループ	30 (午前18・午後12)
4・5か月	男 4 女 4	33 (午前17・午後16)
6・7か月	第2グループ	16 (午前7・午後9)
8・9か月	男 2 女 2	19 (午前8・午後11)
10・11か月		15 (午前8・午後7)
12・13か月	第3グループ	13 (午前10・午後3)
14・15か月	男 2 女 2	18 (午前13・午後5)
16・17か月		17 (午前13・午後4)
	計	161 (午前94・午後67)

ら5か月、6から11か月、12から17か月の異なる3つの被験児グループの資料をあわせた擬似縦断的なものであり、分析の基礎となるのは、2か月単位でまとめた8つの月齢グループである。

#### 2. チェックリストの信頼性

チェックリストの信頼性を知るために、次のような便宜的な方法を用いた。すなわち、ふたりの観察者が担当の被験児の任意の1セッションについて、VTR録画からチェックリストを作り、その両者のチェックの一致度（一致したチェック数と総チェック数の比）を計算した。5人の観察者の担当の組合せは8通りであった。8組の一致度の平均は、子どもの項目については、.808、養育者の項目については、.907であり、両者を合わせたものは、.847であった。

### III. 結 果

#### A. 頻度による子どもの行動の分析

チェックリストの子どもの行動項目から、頻度の極端に少ない項目を除き、他を以下の5つの行動カテゴリに分類する。各カテゴリについて発達の傾向を調べる。

##### 1. 発声行動

発声行動は、〈泣き〉〈むずかり〉〈笑い声〉〈喃語〉〈原初語〉〈言語〉の6項目を含む。全観察時点中の発声行動の割合を、月齢グループ別に平均してみると、8・9か月の17.3%から4・5か月の25.2%の間に散らばっており、ほぼ一定の量を占めている。

図1は、各項目別に月齢変化を折れ線グラフで表わしたものである。〈笑い声〉は最初から出現しているが、全体に頻度が少ない。〈泣き〉は最初多いが、次第に減少

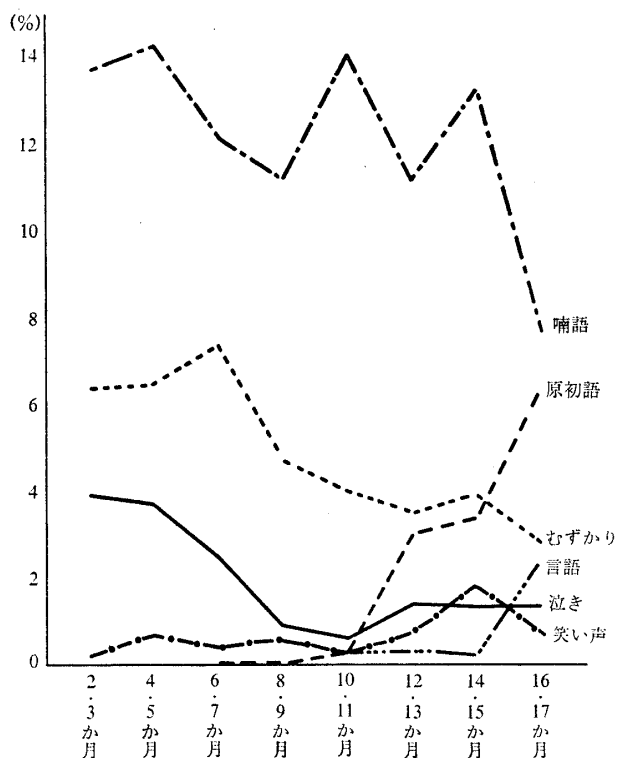


図 1 発声行動

し、8・9 か月から10・11か月にかけて特に少ない (4・5 と 6・7, 6・7 と 8・9 か月それぞれの間で  $p < .005$ ; 月齢グループ間の頻度の差の検定はすべて  $\chi^2$  検定によるものであり、以後有意水準のみを示す)。しかし、12・13 か月で少し増加する傾向がある ( $p < .005$ )。〈むずかり〉も減少傾向を示し、特に8・9 か月で減る ( $p < .005$ )。〈喃語〉は、発声行動の中では全体に一番頻度が多い。2・3 か月から14・15か月までの間は増減を繰り返す、はっきりとした傾向はないが、16・17か月になると激減する ( $p < .005$ )。〈原初語〉は、増加の傾向を示している。6・7か月で初出するが、頻度は少なく、12・13か月で増加し ( $p < .005$ )、16・17か月でさらに増える ( $p < .005$ )。〈言語〉は、10・11 か月で初出し、16・17 か月で特に増える ( $p < .005$ )。しかし、まだ頻度は少ない。

2. 表情及び手・腕による伝達行動

この行動カテゴリは、図2に折れ線グラフで示してある6項目を含んでいる (ただし、〈拒否〉は頻度が少なかったため、チェックリストの項目33〈拒否〉—顔による—と項目36〈拒否〉—手・腕による—とを合計した)。この行動カテゴリの各項目は、全体に頻度がかなり少ない。各項目別に月齢による傾向を見る。

まず、〈拒否〉は2・3か月からすでに出ているが、以後特に傾向はない。〈不快〉は、泣いている時の表情も含

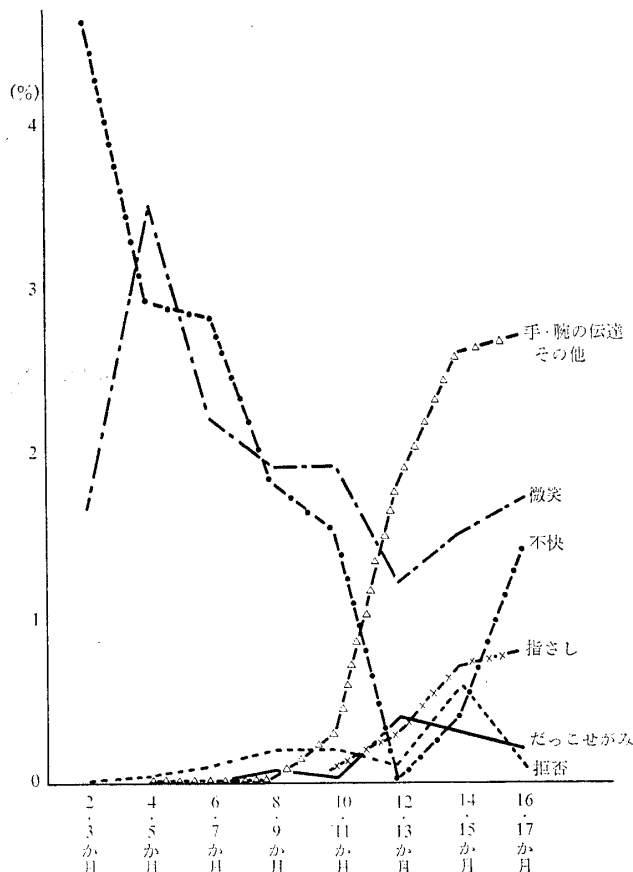


図 2 表情及び手による伝達行動

まれるため、2・3か月から多い。しかし、すでに4・5か月で減少し始め ( $p < .005$ )、8・9か月、12・13か月でさらに減少する (両方とも  $p < .005$ )。だが、16・17か月になると再び増える傾向を示す ( $p < .005$ )。〈微笑〉は、特に4・5か月が多い (2・3か月、6・7か月との差はともに  $p < .005$ )。その他の月齢グループではほぼ一定である。〈指さし〉は10・11か月で初出し、14・15か月で増加する ( $p < .005$ )。〈だっこせがみ〉及び〈手・腕による伝達 (その他)〉は、ともに4・5か月で初出し、12・13か月で増加する (ともに  $p < .005$ )。特に、〈手・腕による伝達 (その他)〉の増加は著しい。

3. 視線

このカテゴリは、〈開眼〉〈注視・物〉〈注視・人〉〈追視・人と物〉 (〈追視・人〉と〈追視・物〉は互いに頻度が少ないので合計した) の計4項目を含む。図3は、〈注視・人〉をさらに自分の身体を見る場合 (チェックリストの項目8〈注視・人 (S)〉) と、それ以外の人を見る場合 (項目4~7をまとめて、〈注視・人 (M, F, O, I)〉とする) とに分けて項目別に折れ線グラフで表わしたものである。また、図4には〈注視・物〉をさらに、自分の持っている物 (項目9〈注視・物 (O)〉) と、それ以外の

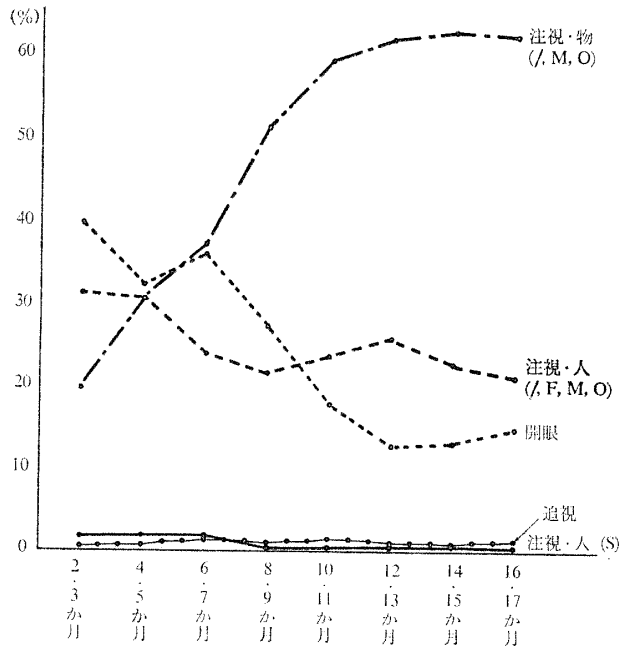


図 3 視線 (1)

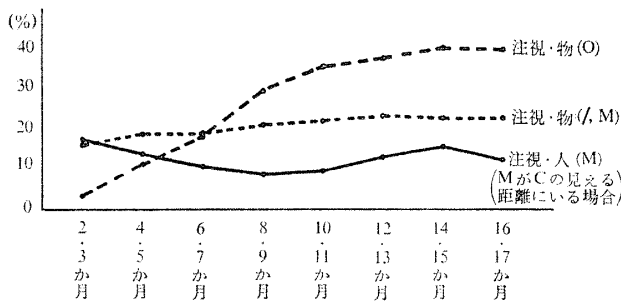


図 4 視線 (2)

物 (項目10・11をまとめて〈注視・物(M, I)〉とする) とに分けてグラフで表わしてある。この図にはまた、母親が子どもから見える範囲内にいる時(〈母親在〉)を 100 として、子どもが母親を見る割合を表わしたグラフ(〈注視・人(M)〉)も示してある。以下、それぞれの傾向を見てみる。

〈開眼〉は、視点を客観的に判断できない場合だが、全体に減少傾向を示し、特に6・7か月以後8・9か月、10・11か月と月齢に伴って減少し(それぞれ  $p < .005$ )、以後ほぼ一定になる。〈注視・人〉は2・3月から4・5か月で多いが、6・7か月で減少し ( $p < .005$ )、以後ほぼ一定になる。〈注視・物〉は、10・11か月までは増加の傾向を示し(となりあう月齢グループの間でそれぞれ  $p < .005$ )、以後一定になる。この増加傾向は、〈注視・物〉についてさらに細かくみた図4での〈注視・物(O)〉の傾向と一致している(月齢グループ間の差の検定結果も等しい)。しかし、図4の〈注視・物(M, I)〉は、〈注視・物(O)〉とは異なる傾向を示し、2・3か月と4・5か月の間で増加する ( $p$

$< .005$ ) が、以後一定になる。次に、〈注視・人(M)〉を見ると、6・7か月までは減少し ( $p < .005$ )、以後一時安定し、また12・13か月から増加して ( $p < .005$ ) ほぼ一定となっている。〈注視・人(S)〉は、全体に頻度が少ないが、2・3か月から6・7か月までは一定で、8・9か月で減少し ( $p < .005$ )、以後再び一定になる。以上はほぼ静止している人や物を見る場合についてである。動き(主に位置変化)を伴う人や物の追視の場合(〈追視・人と物〉)は、全体に頻度が少なく、4・5か月から6・7か月にかけて増えており ( $p < .005$ )、以後一定になる。

4. 手・腕の活動

このカテゴリは、「人」「物」についての次の6項目を含む。「人」については、〈つかむ・人(I, F, M, R)〉と〈その他・人(I, F, M)〉を加えた項目、〈つかむ・人(S)〉、〈その他・人(S)〉の3項目、「物」については、〈つかむ・物(I)〉、〈つかむ・物(R)〉、〈その他・物〉の3項目である。

全体的に、「人」より「物」の方が頻度が高く、また、増加や減少などの発達の傾向が顕著にみられる。

図5は、「人」の項目についての結果を示す。〈つかむ・人(I, F, M, R)〉と〈その他・人(I, F, M)〉を加えた項目では、減少傾向は、6・7か月 ( $P < .005$ )、14・15か月 ( $p < .005$ ) でみられ、増加傾向は、8・9か月 ( $p < .005$ ) でみられる。〈つかむ・人(S)〉は、2・3か月と4・

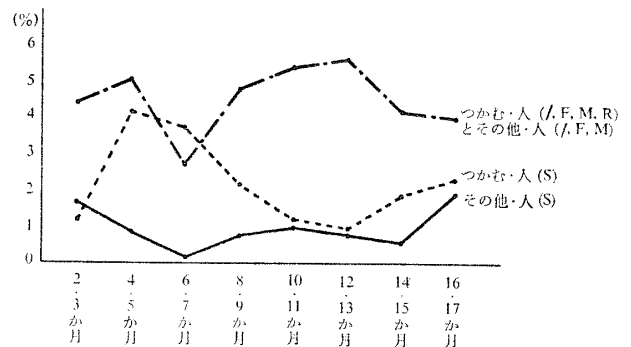


図 5 手・腕の活動 (人)

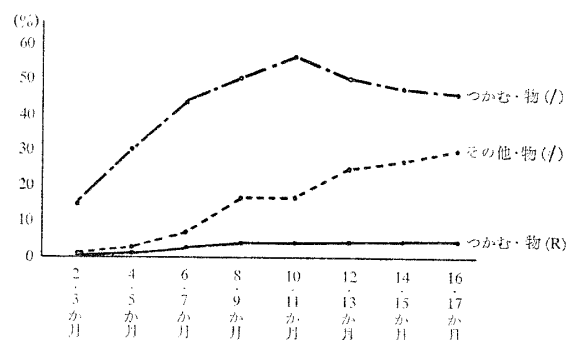


図 6 手・腕の活動 (物)



5か月の間で増加 ( $p < .005$ ) するが、以後、10・11か月まで、減少の傾向にある(6・7と8・9, 8・9と10・11のそれぞれの間で  $p < .005$ )。しかし、12・13か月と14・15か月の間で、増加 ( $p < .005$ ) がみられる。

〈その他・人(S)〉の頻度は全体に少なく、最小は6・7か月の0.2%, 最大は16・17か月の1.9%である。

次に、図6は「物」の項目についての結果を示す。〈つかむ・物(I)〉は、2・3から10・11か月まで急激に増加する(となりあう月齢グループの間でそれぞれ  $p < .005$ )。しかし、12・13か月で減少 ( $p < .005$ ) し、以後、ほぼ一定となる。

〈つかむ・物(R)〉は、わずかではあるが、2・3か月においてすでにみられ、8・9か月まで増加の傾向を示し(となりあう月齢グループの間でそれぞれ  $p < .005$ )、以後、一定となる。

〈その他・物〉は、全体的に増加の傾向がみられ、特に、8・9か月 ( $p < .005$ ) と12・13か月 ( $p < .005$ ) で激増する。

### 5. 姿勢および全身の運動

#### a. 姿勢

移動中の姿勢と、〈養育者による〉姿勢を除いた、子どもの自力による姿勢について、その発達の傾向を、〈立つ〉〈四つんばい〉〈坐る〉〈あおむけ〉〈うつぶせ〉の5項目に関して分析する。(なお、〈立つ〉にはつかまり立ち、〈坐る〉には椅子などにすわる場合も含む)

図7によると、2・3か月では、全観察時点中の半分以上、〈あおむけ〉の姿勢だが、以後8・9か月まで、激減(となりあう月齢グループの間でそれぞれ  $p < .005$ ) し、以後、ほぼ一定となる。

〈あおむけ〉について、2・3か月では、〈坐る〉が多い。〈坐る〉は、〈あおむけ〉と逆に増加の傾向にあり、2・3から8・9か月まで、激増する(となりあう月齢グループの間でそれぞれ  $p < .005$ )。以後、多少の増減はあるが、ほぼ、一定となる。

〈うつぶせ〉も、2・3か月で観察される。以後、8・9か月まで増加(4・5と6・7, 6・7と8・9のそれぞれの間で  $p < .005$ ) し、以後、その時期を頂点として減少(8・9と10・11, 10・11と12・13のそれぞれの間で  $p < .005$ ) の傾向がみられるが、12・13か月以後、ほぼ、一定となる。

〈立つ〉は、わずかではあるが、6・7か月に初出し、以後、14・15か月まで増加していく(となりあう月齢グループの間でそれぞれ  $p < .005$ )。

〈四つんばい〉は、8・9か月に初出し、10・11か月で頂点に達する ( $p < .005$ ) が、以後、減少する(10・11と12

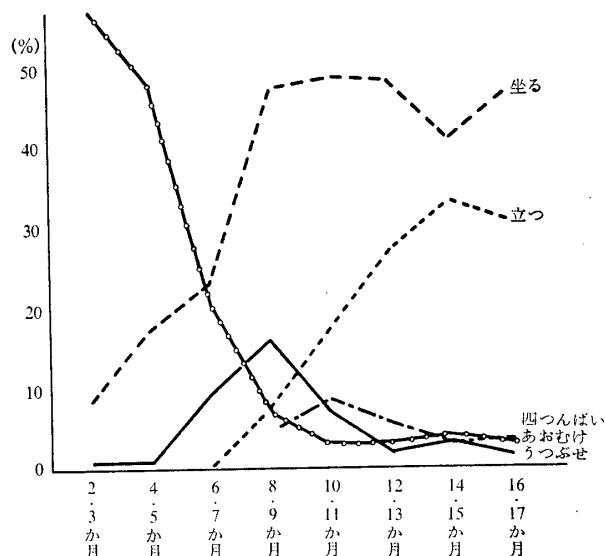


図7 姿勢

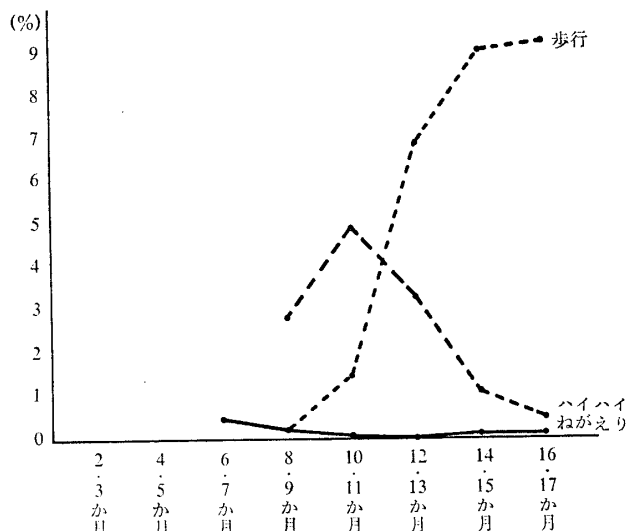


図8 全身の運動

・13と14・15のそれぞれの間で  $p < .005$ )。

#### b. 全身の運動

図8は、全身の運動である移動に関する〈歩行〉〈ハイハイ〉〈ねがえり〉の3項目の結果を示している。

〈ねがえり〉がいちばんはやく、6・7か月に初出しているが、頻度も少なく、以後、大きな変化はみられない。〈ハイハイ〉は、8・9か月に初出し、10・11か月で増加 ( $p < .005$ ) し、最大の値をとるが、以後16・17か月まで、次第に減少する(となりあう月齢グループの間でそれぞれ  $p < .005$ )。〈歩行〉も〈ハイハイ〉と同じく、8・9か月に初出し、以後、14・15か月まで増加する(となりあう月齢グループの間でそれぞれ  $p < .005$ )。

**B. 頻度による母親の行動の分析**

チェックリストの母親の行動項目を、言語に関する項目とそれ以外の項目一般に大別し、それぞれについて、子どもの月齢変化にともなう傾向を調べる。

1. 母親の一般的行動

a. 母子間の距離

図9は「距離」の4項目について、それぞれが占める割合を、月齢グループ別に表わしたものである。

〈接触〉〈腕とどく〉〈視野内〉をあわせた〈母親在〉の割合は、どの月齢でも75%~95%と非常に多い。また、月齢による変化では、2・3から8・9か月まではほとんど変わらないが、10・11か月及び12・13か月以降になると著しく増加する(8・9と10・11の間で  $p < .005$ , 10・11と12・13の間で  $p < .005$ )。

各項目については、2・3か月ではほぼ50%が〈接触〉であるが、その後、減少傾向を示し、特に、8・9か月で

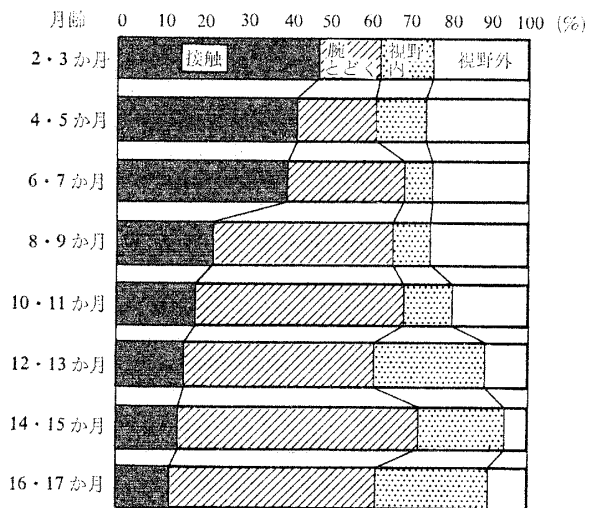


図 9 母子間の距離

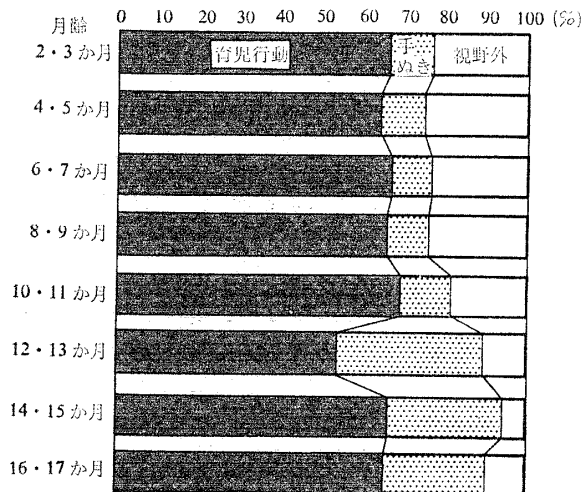
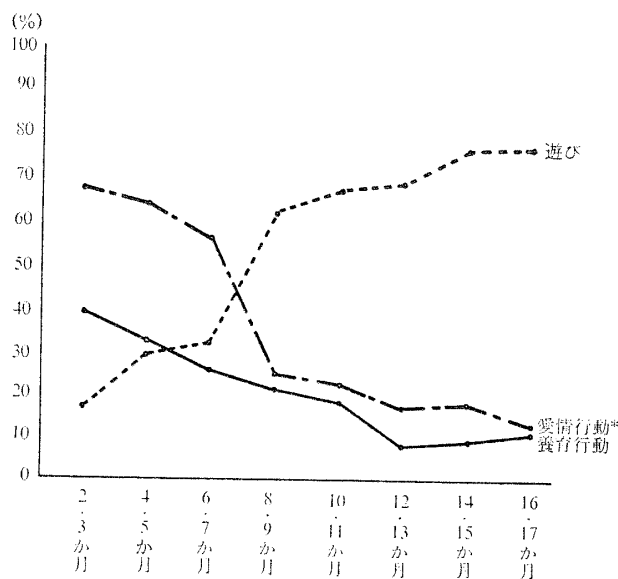


図 10 育児行動の割合



\* 〈注視〉〈傾聴〉は除く

図 11 育児行動の内分け

急激に減少する ( $p < .005$ )。逆に〈腕とどく〉〈視野内〉は8・9か月以降急激に増加していく。この傾向は12・13か月以降、より顕著になる(6・7と8・9の間で  $p < .005$ , 10・11と12・13の間で  $p < .005$ )。

b. 育児行動

図10は〈視野外〉と〈手ぬき〉をあわせた子どもとかかわりをもたない項目と、それ以外の(以後、育児行動とよぶ)項目の割合を、月齢グループ別に表わしたものである。

〈手ぬき〉は2・3から10・11か月までは10%前後を占めるにすぎないが、12・13か月以降約25%と急激に増加する。しかしこれに母親不在である〈視野外〉を加えてみると12・13か月を除いたどの月齢においてもほぼ一定で、35%を占める。したがって、それ以外の、子どもとかかわる育児行動の割合は、月齢にかかわらずほぼ一定で約65%である。

この育児行動を100とした場合の母親の各行動「養育行動」「愛情行動」「遊び行動」の割合をグラフにしたのが図11である。

「養育行動」(チェックリスト66・67・68・69・70・71)の占める割合は、2・3か月では約40%であるが10・11か月まで徐々に減少する。10・11から12・13か月にかけてはかなりの減少 ( $p < .005$ ) がみられるが、12・13か月以降は10%前後とほぼ一定になる。「愛情行動」(チェックリスト76・77・78・79・80・81)も減少傾向を示しており、2・3か月では67%の割合を占めているが、6・7か月では56%になり、8・9か月では25%と急激に減少する

(6・7と8・9の間で  $p < .005$ )。また、12・13か月では20%以下になる(10・11と12・13の間で  $p < .005$ )。これに対して、「遊び行動」(チェックリスト84・85・86・88)は2・3か月では17%を占めるにすぎないが、増加傾向を示し、特に6・7から8・9か月にかけて31%から62%へと急激に増加し ( $p < .005$ )、さらに16・17か月では77%に達する。

(1) 遊び行動

「遊び行動」の各項目の割合を育児行動を100として示したものが図12である。

〈誘導〉およびそれともなう物の使用〈誘導・物〉は、月齢により多少の増減はあるが、ほぼ一定で10%~25% (〈誘導・物〉については10%~20%)を占める。〈誘導〉の中ではどの月齢でも常に〈積極的誘導〉の割合の方が〈消極的誘導〉より多くなっている。これに対して、〈傍観〉は2・3か月では5%に満たないが、月齢とともに増加し、特に6・7から8・9か月にかけては15%から40%へと急激に増加する ( $p < .005$ )。また、〈参加〉は6・7か月に初出、その割合はわずかであり10・11か月まではほとんど変化がみられない。が、12・13か月では増える ( $p < .005$ )。

(2) 愛情行動

図13及び図14は「愛情行動」の主要な項目の割合を示したものである。

〈おんぶだっこ〉は2・3か月では約50%を占めるが、月齢が増すとともに減少し、特に6・7から8・9か月にかけては34%から10%と急激に減少する ( $p < .005$ )。12・13か月においてもかなり減少する ( $p < .005$ )。〈接触〉は2・3から6・7か月までは22%~23%とほぼ一定であ

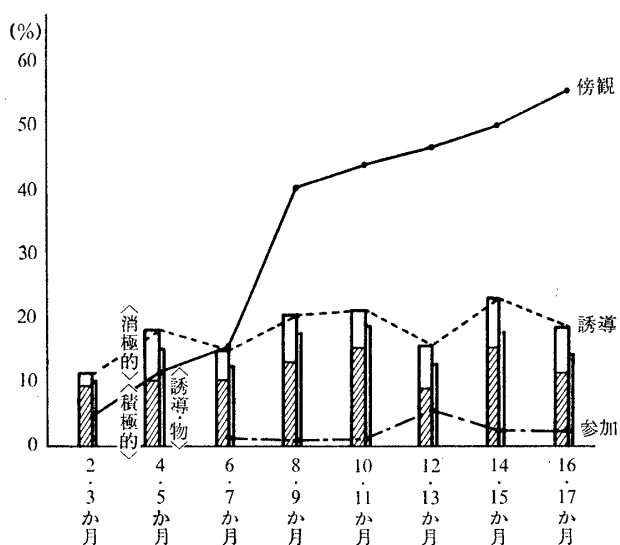


図12 遊び行動

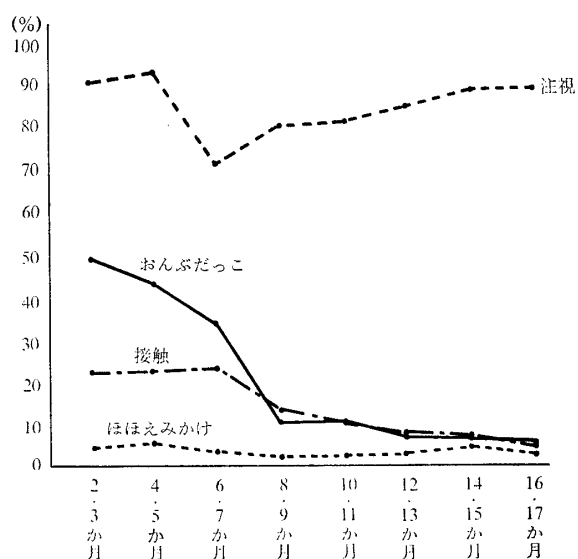


図13 愛情行動 (1)

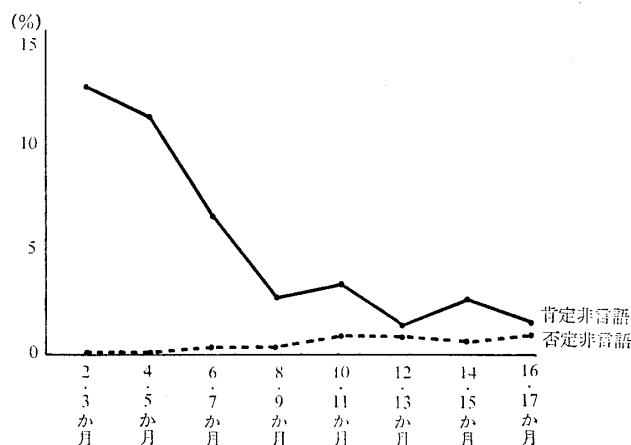


図14 愛情行動 (2)

るが、8・9か月になると13%と〈おんぶだっこ〉同様、著しく減少し ( $p < .005$ )、その後も徐々に減少する。

一方、〈注視〉はどの月齢においても非常に多く、多少の増減はあるにしても70%~90%を占める。〈ほほえみかけ〉も2%~5%と少ないのではあるが、〈注視〉同様かなり一定している。

また、〈肯定非言語〉〈否定非言語〉についてみると、〈肯定非言語〉は2・3, 4・5か月で10%以上であったのが、8・9か月になると3%とかなり減少する ( $p < .005$ )。〈否定非言語〉は2・3, 4・5か月でほとんどなかったが、6・7か月以降わずかながら増加傾向を示し、特に10・11か月では増加する(8・9と10・11の間で  $p < .005$ )。

2. 母親のことばかけ

母親が子どもに目の届く距離にいるときを100とした場合の、母親の言語的働きかけの割合をグラフにしたも

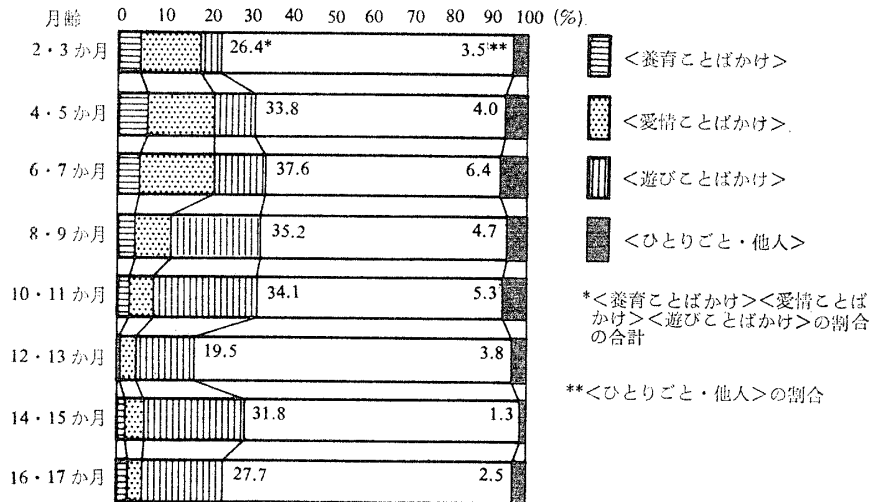


図 15 母親のことばかけの量 (母親在) を 100 とする

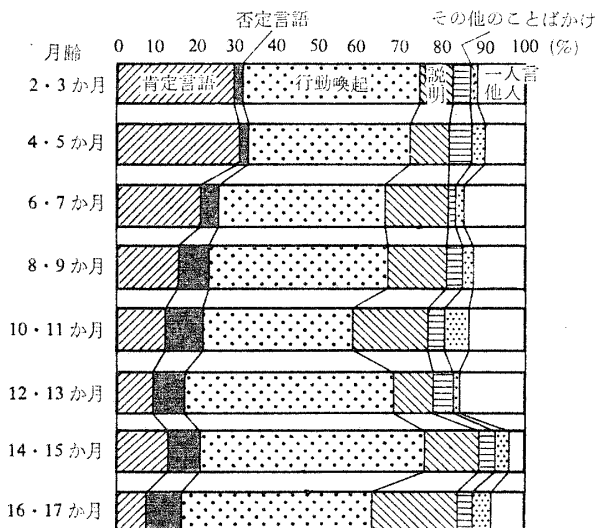


図 16 ことばかけの内容

のが図15及び図16である。

a. ことばかけの量

<母親在>においてことばかけがあるのは、約3分の1である(図15参照)。その多くは、直接子どもを相手になされることばかけであり、これが母親の発声行動のほとんどを占める。ことばかけの全体量の月齢による変化は12・13か月を除いては特に見られない。

「養育行動」「愛情行動」「遊び行動」の3つの育児行動(ここでいう育児行動では、<手ぬぎ>も含まれ、1.での育児行動とはやや異なる)別に、<ことばかけ>の量をみると、各育児行動に費やす時間に<ことばかけ>が比例している(図15と図11を比較参照)。すなわち、どの育児行動においても、同程度の言語的刺激が子どもに与えられている。

b. ことばかけの内容

母親の発声行動は、その機能、内容により12の項目に分けられている。この中から比較的頻度の多いものについてみていく。

図16に示したように、<行動喚起>がどの月齢においても最も多く、ことばかけの40%~50%を占める。これはこの項目に含まれる範囲が広く、質問、促し、要求、かけ声、よびかけ、注意喚起などが含まれることを考慮する必要がある。

月齢による変化が比較的よくみられるのは<肯定言語>と<否定言語>である。あやしことばを主とする<肯定言語>は、4・5か月の30.0%から8・9か月の15.3%に半減する( $p < .005$ )。一方、<否定言語>は、全体量としては少ないが、逆に、4・5か月から増加の傾向を示す(4・5と6・7の間で  $p < .005$ , 6・7と8・9の間で  $p < .01$ )。

<説明・ini>は、母親が自発的に子どもに対して事物の説明をしたものであるが、2・3か月の7.0%から、10・11か月の18.4%に増え(2・3と4・5の間で  $p < .005$ , 4・5と6・7の間で  $p < .005$ , 8・9と10・11の間で  $p < .005$ )、その後10・11から14・15か月の間に一時減少する(10・11と12・13の間で  $p < .005$ , 12・13と14・15の間で  $p < .005$ )が、16・17か月では再び20.6%に増えている(14・15と16・17の間で  $p < .005$ )。

ことばを教えることを意図してなされる<訓練>は、いずれの月齢においてもわずかであり、4%前後である。

C. 相関による分析

チェックリストの2項目の共起の様相を明らかにするために、点相関係数を求めた。その有意性を、子どもの発声行動と視線に関する項目を中心にしてまとめ、表3

表 3. <泣き><むずかり> との共起  
(1) 子どもの 2 項目間

項目	月齢	2	4	6	8	10	12	14	16
		3	5	7	9	11	13	15	18
注視・人・M	泣き	-	-	-				+	-
	むずかり				+	+	+	+	
注視・人・O	泣き	-	-	-	+				-
	むずかり	-	-	-	-				-
注視・物・/, M	泣き	-	-	-	-	-	-	-	-
	むずかり		-	-	-	-	-	-	-
注視・物・O	泣き	-	-	-	-	-	-	-	-
	むずかり		-	-	-	-	-	-	-
手・腕・伝達 その他	泣き								
	むずかり								+
つかむ・物	泣き	-	-	-	-	-	-	-	-
	むずかり	-	-	-	-	-	-	-	-
手・腕・活動 その他・物	泣き		-	-	-	-	-	-	-
	むずかり	-		-	-	-	-	-	-
歩 行	泣き							-	-
	むずかり						-		
静 止	泣き	-				+		+	+
	むずかり	-	-	-			-	+	
身をねじる	泣き		-			-			
	むずかり				-		+		
手足動く	泣き	+			-			-	
	むずかり	+	+	+	+	-			
活 動 的	泣き	+							
	むずかり		+						
姿勢・養育 者による	泣き	-	+	+	+	+	+	+	+
	むずかり	-	+	+	+	+	+	+	+
立つ・/, H	泣き	+	+				+		
	むずかり			-		+		+	+
四つんばい	泣き								
	むずかり				+				
坐 る	泣き	-				-			-
	むずかり		-	-	-	-	-	-	-
あおむけ	泣き	+						+	+
	むずかり		+	+	+	+		+	
うつぶせ	泣き	-						+	+
	むずかり		+		+			+	+

表 4. <泣き><むずかり> との共起  
(2) 母子の 2 項目間

項目	月齢	2	4	6	8	10	12	14	16
		3	5	7	9	11	13	15	17
食 事	泣き	-	-	-					
	むずかり	-			-				
排 泄	泣き	+	+						
	むずかり						+		
睡 眠	泣き	+							
	むずかり				+	+			
養育行動 そ の 他	泣き		+					+	+
	むずかり							+	+
養育行動 ことばかけ	泣き		+						
	むずかり		+						
手 ぬ き	泣き		-	-			-	-	-
	むずかり			-		-	-	-	-
傍 観	泣き	-	-	-	-	-	-	-	-
	むずかり	+	-	-		-	-	-	-
誘導・消極	泣き	-							
	むずかり	-							
誘導・積極	泣き	-	-	-	-				-
	むずかり	-						-	
遊 び 行 動 こ と ば け	泣き	-	-		-			-	-
	むずかり	-							-
注 視	泣き	-				-	+	+	
	むずかり	-					+	+	+
接 触, おん ぶ だ っ こ	泣き	-	+	+		+	+	+	+
	むずかり	-	+	+	+	+	+	+	+
愛 情 行 動 こ と ば け	泣き	+	+	+	+	+	+	+	+
	むずかり	+	+	+	+	+	+	+	+
肯 定 非 言 語	泣き	+	+	+				+	
	むずかり	+	+	+			+	+	+
距 離 視 野 外	泣き	+	+		+				+
	むずかり	+		-		-		-	-

注) 表3~表8では, 正相関(度数 5 以下のものは除く)を  $+(p<.01)+ (p<.05)$  で, 負相関を  $-(p<.01)- (p<.05)$  で表わした。

4, 5, 6, 7, 8 に示した。

1. 〈泣き〉〈むずかり〉との共起

表 3 と表 4 に、〈泣き〉または〈むずかり〉と正相関あるいは負相関のみられる項目を選び、示した。〈泣き〉と〈むずかり〉は、ほぼ同一の項目と共起の傾向を示す。すなわち、「視線」に関しては、6・7 か月までは人も物も

表 5. 〈喃語〉との共起

項目	月齢															
	2	4	6	8	10	12	14	16	3	5	7	9	11	13	15	17
注視・人・M	+	+	+					+	+							
注視・人・O			+		+			+								
注視・物・/, M	+							-	-							
注視・物・O	-	-	-													
手・腕伝達その他								+	+							
つかむ・物																
手・腕活動その他																
歩行																
ハイハイ																
静止																
手・足動く																
活動的																
姿勢・養育者による																
立つ・/, H																
四つんばい																
坐る																
あおむけ																
うつぶせ																
食事																
排泄																
養育行動・その他																
養育行動・ことばかけ																
手ぬき																
傍観																
誘導・消極																
誘導・積極																
誘導・もの																
遊び・ことばかけ																
注視																
ほほえみかけ																
接触, おんぶだっこ																
愛情行動・ことばかけ																
肯定非言語																
距離・視野外																

注視していることは少なく、8・9 か月以降では〈むずかり〉のときに母親を注視することが多い。物を注視することは、どの月齢でも稀である。また〈つかむ物〉〈手・

表 6. 〈原初語〉〈言語〉との共起

項目	月齢	10	12	14	16
		11	13	15	17
注視・人・M	原初語 言語		+	+	+
注視・人・O	原初語 言語			+	+
注視・物・/, M	原初語 言語			-	
注視・物・O	原初語 言語			-	
手・腕・伝達 その他	原初語 言語		+	+	+
歩行	原初語 言語		+		
静止	原初語 言語			-	-
身をねじる	原初語 言語			+	
手足動く	原初語 言語				+
立つ・/, H	原初語 言語	+		+	
四つんばい	原初語 言語				-
坐る	原初語 言語			-	-
手ぬき	原初語 言語			-	-
傍観	原初語 言語	+			+
参加	原初語 言語			+	
遊び行動 ことばかけ	原初語 言語	+		+	+
注視	原初語 言語	+			+

表 7. 〈注視・人〉との共起

月齢	項目	2	4	6	8	10	12	14	16
		3	5	7	9	11	13	15	17
微笑・笑い	注視・人	+	+	+	+	+		+	+
	M								
手・腕・伝達 その他	M						+	+	+
	O							+	+
つかむ・物	M	+		-			+	+	
	O		+					+	
手・腕・活動 その他	M	-	-	-	-	-	-	-	-
	O					-	-	-	-
静 止	M		-	-	-				
	O		+	-	-	-			
身をねじる	M				+	+	+	+	+
	O	+		+	+	+	+	+	+
手足動く	M		+	+	-	-	-	-	-
	O	-	-				-	-	-
ことばかけ	M	+	+	+	+	+	+	+	+

注) この表の〈ことばかけ〉は、「養育」「遊び」「愛情」の3つの〈ことばかけ〉をあわせたものである。

表 8. 〈注視・物〉との共起

月齢	項目	2	4	6	8	10	12	14	16
		3	5	7	9	11	13	15	17
微笑・笑い	注視・物	-	-			-			-
	/, M								
手・腕・伝達 その他	/, M								-
	O							-	-
静 止	/, M	-	-		-	+		+	+
	O	-	-	-	-	-	-	-	-
身をねじる	/, M	+	+	+	+	+	+	+	+
	O	-	-	-	-	-	-	-	-
手足動く	/, M	+			-	-	-	-	-
	O	+	+	+	+	+	+	+	+
ことばかけ	/, M		+	+					
	O		-	-	-	-	-	-	-

注) 〈ことばかけ〉は表7と同様である。

腕の活動(その他・物)との共起も稀である。「姿勢」をみると、〈坐る〉以外のことが多く、2・3か月を除き、おんぶやだっこなどされていることが多い。母親の行動との共起をみると、「遊び行動」との共起は稀で、月齢に

よっては、「養育行動」の項目の幾つかとの共起がみられる。「愛情行動」の〈ことばかけ〉との共起は月齢を問わず多く、〈肯定言語〉との共起も一般に多い。〈泣き〉では〈距離・視野外〉との共起も多い月齢もあるが、〈むずかり〉では、2・3か月を除いて、むしろ稀である。

2. 〈喃語〉との共起 (表5)

月齢にかかわらず一般的な傾向として、母親が遊びを誘導しているときに少ない。また、子どもが〈坐る〉、〈静止〉のときに少なく、〈手か足動く〉、〈活動的〉のときに多い。後半では〈ハイハイ〉、〈歩行〉のときにも多い。さらに物に関しては、2・3か月の〈注視・物(/, M)〉との共起が多いのを除いて、〈注視・物(/, M)〉、〈注視・物(O)〉、〈つかむ・物〉、〈手腕活動・その他・物〉のいずれとの共起も少ない傾向がある。他方、人との関係を見ると、2・3か月では、母親が〈排泄〉(養育行動(その他))のとき、また〈ほほえみかけ〉しているときに多く、子どもは母親を注視しているときに多い。ただし母親が視野外のときの生起率も高い。4・5から6・7か月では、母親が〈視野外〉のとき、または〈手ぬぎ〉のとき、あるいは、子どもが母親を注視しているときの喃語が多い。8・9から10・11か月では、〈注視・人(M)〉との共起は減少し、母親の〈傍観〉または〈手ぬぎ〉、〈視野外〉との共起が多い。12・13と14・15か月では〈手・腕の伝達(その他)〉との共起が多くみられる。また14・15か月以降、再度、母親を注視することとの共起が多くなる。

3. 〈原初語〉〈言語〉との共起 (表6)

〈原初語〉と〈言語〉とはほぼ同一の項目と共起する傾向がある。すなわち、母親との関係では、「遊び」の〈傍観〉または〈参加〉との共起、さらに〈ことばかけ〉との共起の傾向がある。子どもが、母親または観察者を注視しているときに多い。反対に、子どもが物を注視しているときの〈原初語〉〈言語〉は少ない。子どもの姿勢に関しては、立っているまたは歩行中に多く、静止のときには少ない傾向がある。〈原初語〉は12・13か月以降、〈言語〉は14・15か月以降、〈手・腕の伝達(その他)〉との共起が多い。

4. 〈注視・人〉との共起 (表7)

母親を注視するときと、観察者を注視するときとはほぼ同様の傾向がある。すなわち、〈微笑、笑い〉との共起が多くみられる。また、〈手・腕の活動(その他)〉との共起は稀であるが、〈つかむ・物〉との共起は多くみられる月齢グループもある。〈身をねじる〉との共起が一般に多く、逆に〈静止〉しているときは4・5か月の〈注視・人(O)〉を除いて少ない。他方、〈手か足動く〉は、4・5と6・7か月の〈注視・人(M)〉との共起が多いのを除き、全

体的に少ない。12・13か月以降は〈注視・人(M)〉、さらに14・15か月以降では〈注視・人(O)〉と、〈手・腕の伝達(その他)〉との共起が多い。また、子どもの〈注視・人(M)〉と、母親の〈ことばかけ〉の共起が月齢を問わず多い。

#### 5. 〈注視・物〉との共起(表8)

対人のときと異なり、物を注視しているときの微笑、笑いは稀である。また、〈手・腕の伝達(その他)〉と物の注視との共起も少ない。自分のもっている物を注視しているときには〈静止〉〈身をねじる〉は少なく、〈手か足動く〉が多い。〈注視・物(I, M)〉では逆に、〈身をねじる〉との共起が多い。また、〈注視・物(O)〉と母親の〈ことばかけ〉の共起は稀であるが、〈注視・物(I, M)〉では、4・5か月と8・9か月で母親の〈ことばかけ〉との共起が多い。

### III. 考 察

#### A. 母親の行動

頻度による分析からわかった母親の行動の主要点を以下にまとめる。

##### 1. 母親と子どもが相互交渉しうる時間

生後2・3か月から8・9か月では観察時間の約75%、10・11か月では80%、12・13か月から16・17か月では90%、母親と子どもは互いに目の届くところにいる。つまり、どの月齢においても、母親と子どもは非常に多くの時間、相互に交渉しうる距離にいる。特に、12・13か月以降は、以前にも増して、この時間は多くなっている。

##### 2. 母親が子どもに働きかける時間

母親の方から子供に対して何らかの働きかけをしている時間(育児時間)は、月齢にかかわらず一定で、観察時間の65%を占める。

##### 3. 母親の働きかけの内容

働きかけの内容は、月齢を問わずに一定のものもあるが、多くは月齢によりかなり変化がみられる。

##### a. 子どもの月齢によって変化する行動

(1) 授乳・排泄の世話などの、子どもの生理的欲求の充足のための行動(養育行動)は、2・3か月までは母親の働きかけの40%を占めているが、10・11か月まで徐々に減少する、12・13か月以降はほぼ一定し、10%がこれにあてられるようになる。

(2) それ以外の、いうなれば心理的欲求の充足といった面の行動は、6・7か月まではだっこ・おんぶ・かまくたたく・なでる・さわるなどの皮膚接触によるものを中心であり、働きかける時間の半分以上は、なんらかのか

たちで身体に接触している。しかし8・9か月以降、皮膚接触をとともなり行動は著しく減少し、かわって、ひとり遊びしている子どもをみまもるなどの、より間接的な行動が急激に増加し、16・17か月ではこの行動が逆に半分以上を占めるようになる。

つまり、子どもに対する母親の行動には、直接的な皮膚接触による交渉から間接的な遠受容器による交渉へという変化がみられ8・9か月はその変換点である。

(3) あやし行動及びあやしことばも同じく8・9か月以降著しく減少する。これに対して、禁止、叱責などの行動及びことばかけは少しおくれて10・11か月以降増加傾向を示す。

つまり8・9か月から10・11か月にかけては、子どもを快の状態におくことを目的とした働きかけからしつけを目的とした働きかけへの移行がみられる。

このことを考えあわせれば、(2)で述べた8・9か月は単に、直接的交渉から間接的交換への変換点ではなく、“しつけの開始”といった意味で育児の大きな変換点といえるだろう。

(4) 一緒に遊ぶという相互交渉の行動は12・13か月以降かなり多くなる。

##### b. 子どもの月齢により変化のみられない行動

(5) ガラガラをふってみせるなどといった、子どもに物をみせ、その機能を示すという行動は、2・3か月でもすでに母親の働きかけの10%以上をしめ、それ以降もほぼ一定で20%前後をたもつ。

(6) 子どもをみつめるという行動は、どの月齢でも70%~90%という非常に多くの割合を占める。これは、子どもが何をしているかにかかわらず、ほとんどの場合母親は子どもの動作、行為に注目し、子どもからなにか働きかけがあればそれに応じられる状態にあることを示している。

(7) ことばかけも、量としては、月齢にかかわらずほぼ一定で、相互に交渉しうる時間のほぼ3分の1は、育児行動の内容にかかわらず、母親は子どもに何らかの言語的刺激を与えている。

ことばかけの内容についても、今回チェックリストで用いられた項目については(3)でのべたあやしことば及び禁止、叱責ことば以外は、月齢による変化はみられない。

しかし、結果でもふれたように、チェックリストのことばかけ項目は、分類が大まかすぎたこともあり、この内容については、今後のエピソード記録の分析によってその詳細を明らかにしたい。



## B. 子どもの行動

### 1. 子どもの発達傾向

頻度による分析からわかった、子どもの特定行動の初出、増減の変化、安定化の傾向に、相関によってわかった各行動間の関係を加え、月齢グループごとに主要点をまとめたものが、表9である。この表から、言語行動に関わりうる行動の発達を探ると、各月齢グループの主な特徴は以下になると考えられる。

#### a. 2・3 か月

物よりも、人に対する興味に支配され、特に笑いかけが人に対しては生ずるが、物に対しては生じない。人の中では、養育者である母親に対する志向性が強い。この時期は、主に生理的要因による不快が多く、母親が不在だとその状態が続くが、養育、愛情行動を受けると、快の状態になり、手足の運動を伴って喃語が生ずる。快の状態が続けば、母親が不在でも喃語が生じうる。喃語や泣き、むずかりに伝達意図は認められない。しかし、部屋の隅にいる観察者を見るために、首を曲げるなど、意図的行動が見られる。

#### b. 4・5 か月

手や身体の運動能力の発達に伴い、物に対する反応が増加する。母親の存在の有無や、生理的欲求に直接結びついた反応が消え、母親に抱かれていても、泣き、むずかりが続く。また、母親に対する反応が観察者に対しても拡張され、笑い、喃語が对人的行動としての性質を強く示し始めている。特に、喃語が物に対しては発せられなくなっていることも、その現われといえる。しかし逆に、2・3か月でもそうであったが、母親の不在の時や、いても子どもに関わっていない時にも喃語が生じ易い。このことは、喃語としてひとまとめにされているものの中に、機能として区別される2種類の喃語が混在していることを示すものと考えられる。そのひとつは、人に対する、発声による働きかけという機能であり、将来の言語による伝達行動に結びつきうるものと言える。もうひとつは、発声による自己刺激的な遊びの機能である。特に、喃語が、覚醒時に、身体の活動を伴って生じ易いことを考えると、手足の運動と同じように、子どもに可能な活動のひとつとして、発声も自己刺激的働きを持つものと思われる。

この時期には、明確な伝達意図のある行動として、抱っこせがみや、手を物にのばして母親に要求するなどの手の運動による伝達行動が初めて現われる。全体に、伝達意図の芽ばえの時期といえる。

#### c. 6・7 か月

物に対する反応が、人に対するそれを上回り始める。

ねがえり、つかまり立ちが初出し、手の活動の活発化など、運動能力の発達が、物に対する興味に拍車をかけている。人を見るものが減少し、以後そのレベルが続くこと、特に、母親を見るものが減っていることは、母親を中心とする人への慣れ、探索の対象としての人に対する興味の消失を示していると思われる。しかし、反面、身をねじって観察者を見るなど、新奇な対象への興味は、人についても消えてはいない。

伝達面では、原初語が初出し、伝達意図が何らかの音声を伴って表現される。

#### d. 8・9 か月

運動能力、物に対する反応、伝達、全ての面で飛躍的に発達する時期である。坐ることが安定し、一人で身体を支持できる。ハイハイ、伝い歩きなどの移動能力も初出し、意図を自力で実現する可能性が増える。加えて、物をつかんだり、あやつることが上達する。リーチングも最高頻度に達し、以後そのレベルを保つことから、手をのばしてつかむという一連の動作が完結したことがうかがえる。つかんだ物を探索的に見ることも急激に増え物に対する興味の強さを示している。

次に、不快や泣き、むずかりは減少するが、母親を見ながらむずかるという新しい行動が現われる。すなわち単なるむずかり、または不快のむやみな表出が、不快の訴えや、快の要求という効果的な伝達機能を持つものに変ってきている。喃語にも変化があり、子どもは母親を見ていなくても、母親が子どもを見守っている時に生ずるようになる。そして、以後この傾向が続く。これは母親を見て喃語を発するのが直接的だとすれば、間接的に対人を意識したものと考えられるかもしれない。

この時期の母親の行動の変化は、子どもの変化に負うところが大きい。子どもの運動能力の発達が、母親による身体支持や移動のための接触を減少させ、物への興味や操作の上達が、母親を遊び行動へと導く。遊びの中でも、母親の側からの誘導ではなく、傍観が急増していることも、子どもの、物を対象とした一人遊びの能力を示している。さらに、母親の側からの積極的变化としては肯定的言動が減り、否定的言動が増加する傾向がある。これは、母親が子どもの様々な能力の出現に気づき、それに見あうように許容基準の修正を行なっていることを示す。さらに、保護の仕方が完全な養護から、危険からの救助へと変わったことをも示している。

#### e. 10・11か月

運動、移動能力がますます向上する。物をつかむことも最高に多く、つかんだ物を見ることも増加し、以後同レベルを保つ。また、つかんでいない物を探索的に見る

表 9. 行動カテゴリ別発達的变化

表内の記号 M: 母親  
 O: 観察者 \*「以後安定」とは、後の月齢でも同程度、又は  
 R: reaching 同じ関係で発生する傾向をいう。

	発 声 行 動	表情・伝達行動	視 線	手・身体の活動
2・3 か月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・笑い声、泣き、むずかり、喃語の区別がある。</li> <li>・泣き、むずかりが多く、主にM不在の時生じ、Mがいても見ない。</li> <li>・喃語は主にMを見て発するが物を見てのこともある。Mが養育、愛情行動をしている時に多い。手足を動かす(以後6・7か月まで)、M不在の時にも発する(以後10・11か月まで)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不快、微笑の区別がある。</li> <li>・不快が多い。</li> <li>・Mを見て笑う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視点の定まらないことが多い。</li> <li>・人を見ることが物を見ることより多い。</li> <li>・Mを見ることが多い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主におおむけで、動けない。</li> <li>・物をつかめるがそれ以上のことはできない。</li> <li>・物を見て手足を動かしたり、首をOの方に向けたりできる。</li> </ul>
4・5 か月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・泣き、むずかりの量に変化なし。Mと接触して泣く(以後安定*)。</li> <li>・喃語は、MだけでなくOを見ても発する。物を見て発しない(以後安定)。また、Mが手ぬきの時にも発する(以後12・13か月まで続く)。活動的な時発する(以後ほぼ安定)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不快が激減する。</li> <li>・微笑が最高になる。</li> <li>・だっこせがみ、手の伝達が初出する。</li> <li>・MだけでなくOを見ても笑うようになる(以後安定)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視点不定の量が少し減る。</li> <li>・人と物を見ることが同量ある。</li> <li>・もっていない物を見ることが増加(以後安定)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身をねじったり、お坐りが増えるが、主におおむけ。</li> <li>・物をつかんだり、他の活動ができるようになる。Rも増加。</li> <li>・もっている物を見て手足を動かす(以後安定)。</li> </ul>
6・7 か月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・泣きは少し減少。むずかりは変わらない。</li> <li>・喃語は特にMを見て発する。</li> <li>・原初語が初出。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・視点不定の量が少し増加。</li> <li>・人を見ることが減る(以後安定)。</li> <li>・物を見ることが増加、人より多い。</li> <li>・Mを見ることが減少(以後10・11か月まで同じ)。</li> <li>・追視増加(以後安定)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ねがえり、つかまり立ちが初出。うつおせ、お坐りが増加。おおむけは減少。</li> <li>・物をつかんだり、その他の活動、Rが増加。</li> <li>・身をねじってOを見る(以後安定)。</li> </ul>
8・9 か月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・泣き、むずかりが激減。</li> <li>・この月齢のみOを見て泣く。</li> <li>・むずかる時、Mを見る(以後14・15か月まで続く)。</li> <li>・喃語は、Mが傍観の時にも出る(以後ほぼ安定)。ハイハイしながら発する(以後安定)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不快がさらに減少。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視点不定の量減少。</li> <li>・物を見ることがさらに増加。特に自分のもっている物を見るのが急増する。</li> <li>・自分の身体を見ることが減少(以後安定)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイハイ、つたい歩き、四つんばいが初出。お坐りが急増(以後安定)。つかまり立ち、うつおせ、身をねじることがさらに増加。おおむけが激減(以後安定)。</li> <li>・物をつかむのが増加。その他の活動急増。Rがさらに増加(以後安定)。</li> <li>・身をねじってMを見る(以後安定)。</li> </ul>

(続く)

表 9. 行動カテゴリ別発達的变化 (続き)

	発 声 行 動	表情・伝達行動	視 線	手・身体の活動
10 ・ 11 か 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・泣き、むずかりともに少ない。<b>M</b>が見ている時に泣く(12・13か月も同様)。</li> <li>・喃語は、<b>O</b>を見て発する。</li> <li>・原初語が増加し、<b>M</b>が傍観、注視している時に発する。</li> <li>・言語が初出し、<b>M</b>が傍観、遊びのことばかけをしている時に発する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指さしが初出。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視点不定の量が減少(以後安定)。</li> <li>・物、主にもっている物を見ることが増加(以後安定)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイハイ、四つんばいの増加。立つ、歩行が急増。活動的な時増加(以後ほぼ安定)。うつぶせ減少。</li> <li>・物をつかむことが最高に多い。</li> <li>・もっていない物を見る時、静止している(以後ほぼ安定)。</li> </ul>
12 ・ 13 か 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・泣きが少し増加(以後安定)。<b>M</b>を見て泣く。<b>M</b>が手ぬきでない時泣く(以後安定)。</li> <li>・<b>M</b>が注視している時むずかっている(以後安定)。</li> <li>・喃語が手の伝達とともに生ずる(14・15か月も同様)。</li> <li>・歩行しながら喃語を発する(以後安定)。</li> <li>・原初語が増加。<b>M</b>を見て発し、手の伝達とともに生ずる(以後安定)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不快がさらに減少。</li> <li>・だっこせがみ、手の伝達が増加(以後安定)。</li> <li>・<b>M</b>を見て手の伝達を行なう(以後安定)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>M</b>を見ることが増加(以後ほぼ安定)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立つ、歩行が急増。手足動くが増加(以後ほぼ安定)。身をねじる、うつぶせ減少(以後ほぼ安定)。ハイハイ、四つんばい減少。</li> <li>・物をつかむことが減少し、逆にその他の活動が急増。</li> </ul>
14 ・ 15 か 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>M</b>が養育行動をしている時に泣く(16・17か月も同様)。</li> <li>・喃語は、<b>M</b>を見て発する(16・17か月も同様)。</li> <li>・原初語は<b>M</b>だけでなく、<b>O</b>を見て発するようになり、<b>M</b>が手ぬきでなく、遊びのことばかけをしている時に発し、身体は静止していない(16・17か月も同様)。</li> <li>・言語は、<b>O</b>を見て発し、物を見ることはなく、手の伝達を伴うことが多い(16・17か月も同様)。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指さしが増加する(以後安定)。</li> <li>・<b>M</b>だけでなく、<b>O</b>を見て手の伝達を行なう(以後安定)。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・立つ、歩行がさらに増加(以後安定)。</li> <li>・ハイハイ減少。四つんばい減少。</li> </ul>
16 ・ 17 か 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・むずかりがさらに減少。手の伝達とともに生ずる。</li> <li>・喃語が激減する。<b>O</b>を見ても発する。</li> <li>・原初語が増加する。</li> <li>・言語が増加。<b>O</b>だけでなく、<b>M</b>を見て発する。また、<b>M</b>が手ぬきでなく、傍観、注視しており、遊びのことばかけをしている時に多い。歩行しながら発する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不快が少し増加する。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハイハイがさらに減少し、ほとんどなくなる。</li> <li>・手のその他の活動がさらに増加する。</li> </ul>

時には、静止するようになり、余裕のある効果的探索が可能になったことを示している。

伝達面では、まず、指さしが初出している。8・9か月で、リーチングが行動として安定した後なので、リーチングの機能的、形式的変形として、指さしが出現し始めたとも考えられる。次に、原初語が増加し、特に母親が注視している時に生じている。これは、間接的に対人を意識した上での伝達とも考えられるし、伝達が効果的であるために母親の注意を引いたとも考えられる。いずれにしても、効果的伝達であることに違いはない。さらに、音声的には不正確であるが、初めて言語が出ている。言語も、母親が注視している時に生じている。しかも、遊び場面で母親がことばかけをしている時に出ている。この傾向は、16・17か月にもある。一般に、言語による伝達では、互いのことばが共起するのは不自然なことである。そこで、初期の言語では、新しい伝達形式の練習という性格が強くと伝達を効果的にするための継時性が無視され易いのではないかと考えられる。

#### f. 12・13か月

今までの対物志向に質的变化が現われ、伝達面でも著しい発達が見られる。まず、ハイハイから歩行へと移動方法が変化し、それに伴って、自由になった両手で複雑な操作をすることが多くなる。従って、物に対する探索行動がより高度になる。

伝達面では、母親を明確に対象とした伝達が、様々な形式で現われる。まず、泣くことが少し増え、母親が手をぬいていないときに泣く、母親を見て泣く、という泣きによる訴えが出る。むずかりも同様な伝達機能を示している。更に、抱っこせがみや、手による伝達が増加し定着する。特に手による伝達は、母親を見ることや、喃語、原初語と共に生じ、伝達をいっそう効果的にしている。

このように伝達面の発達の著しい時期に、母親との参加遊びが増えている。手による伝達には物を渡す行動が含まれているが、そのような行動が可能になると、物を取り扱う一人遊びだけではなく、役割交替を必要とする参加遊びが可能になるものと思われる。

#### g. 14・15か月

立つこと、歩行が更に安定する他は、伝達面の発達が目立つ時期である。まず、母親だけを対象としていた伝達が、観察者にも拡張され、手による伝達や、原初語、言語による伝達を行なう。また、言語は、手による伝達と共に発せられるようになる。更に、指さしが増加し定着する。

#### h. 16・17か月

手の操作がさらに上達することを除いて、この時期の

発達も伝達面のそれに帰される。まず、以前から不快の伝達機能を持っていたむずかりが、さらに、手による伝達と共に生ずることで、より複雑な機能を示し始めている。つまり、単なる不快の訴えや快の要求ではなく、積極的に解決の方策を示すことなどである（例としては、母親に蓋のついた入物をさし出しながらむずかり、蓋をとってもらふことなどがある）

次に、今まではほぼ同程度で増減をくりかえしてきた喃語が明らかに減少し、逆に原初語、言語が増加する。喃語にも、対人的伝達の機能が多少あったが、機能的、形式的により伝達にふさわしい原初語や言語に、伝達の機能をゆずり渡したと言える。さらに喃語が減少する理由としては、遊び行動のひとつとしての機能も、他の行動に移行していくことが考えられる。つまり、物の操作の上達が、より遊びの機能を果たしうるだろうし、同じく発声による遊びとしても、メロディや意味のある、歌やことば遊びの方が有効になっていくものと思われる。

#### 2. 伝達行動の成立過程における人と物

前節において、子どもの発達傾向の大筋をみてきたがこの節では、伝達行動の発達において重要であると思われる要因の中で、特に「人」と「物」の認知をとりあげ、両者の関係を発達の的に明らかにしたい。

今回のデータ分析により、対「人」、対「物」行動の変化について、次の3段階が認められた。

##### a. 段階 I

この段階は、一部に「人」と「物」の間で分化された行動がみられるが、まだ、その分化が不十分な段階と考えられる。

まず、視線をみてみると、2・3か月で「物」より「人」を注視する傾向がみられる。特に、母親が子どもの見える距離にいる場合の「子どもが母親を注視する」という行動は、この時期に多い。

微笑や笑い声については、2・3か月から「人」「物」の間で分化がみられ「人」に対して笑うことが多く「物」に対しては笑うことが少ない。つまり、微笑や笑い声では、2・3か月の頃から「人」と「物」で分化された行動がみられ、子どもは「人」と「物」を区別できる。しかし、発声行動をみると、2・3か月では、まだ「人」と「物」が未分化で「人」「物」の両方に対して、喃語が発せられている。

また、4・5か月では「人」と「物」に対して、同じ割合で注視行動が生じており「人」と「物」に対して同程度の興味を示していると考えられる。

##### b. 段階 II

視線について、子どもは、6・7か月から「人」より

「物」を多く注視する。さらに「物」の注視は10・11か月まで増加の傾向を示しているので、この段階では、「物」志向の、視覚的な探索行動が多く行われるようになると考えられる。

また、発声行動においても、4・5か月以後「人」を注視している時に、多く、発声行動が生じていることから、この段階では「人」と「物」の分化がみられる、と言える。

### c. 段階 III

視線においては、6・7か月から増加を示していた「物」注視の傾向が、10・11か月以後一定になり「物」に対する視覚的な探索行動は安定していく、と考えられる。

それに対して、前出のように「母親」注視の行動は、2・3か月と4・5か月の時期に多く、それを第1の「母親」志向の時期とすると、12・13か月以後は、第2の「母親」志向の時期と考えられ、母親を見る行動がふえる。このような「物」と「母親」の関係から、この段階は、それ以前の「物」志向から「母親」志向へ、子どもが変化していく時期であると考えられる。

発声行動については、12・13か月以後、子どもの伝達意図が比較的明らかである〈原初語〉〈言語〉の発声が多くなり、しかも、それらの発声は「人」を注視している時、多く発せられる傾向にある。つまり、意図的な発声行動は「人」を注視しながら行われるようになり「人」が伝達の対象としての機能をもち始めると考えられる。

また、〈手・腕の伝達(その他)〉の行動も、12・13か月以後、著しく増加し、視線との関係では「人」を見ながらその行動を行うことが多い。しかし「物」を見て、そのような行動を行うことは少なく「人」と「物」がはっきり区別されている。

そこで、上述のことがらをまとめると、12・13か月以後、子どもは、伝達の対象として「人」をとらえ「人」に対して意図的に伝達行動を行う、と考えられる。

では、子どもは、この段階において「物」をどのようにとらえているのであろうか。

前出のように、視覚探索的な「物」志向は、10・11か月以後安定していき、さらに、12・13か月では、手腕の活動による探索行動において、質的な変化がみられる。10・11か月までの「物」にさわる、つかむなどの単純な探索行動が、それ以後、「物」を操作するという探索行動に移行し、「物」のとりあつかいが複雑になっていく。

そこで「人」の注視と、手・腕の活動の関係をみると12・13か月以後「人」を見て「物」をつかんでいる、という行動が多くみられる。10・11か月までは「物」は、視覚探索の対象としての機能しか持っていないが、12・

13か月以後、自己と他者の中で、媒介の機能をはたすようになる。さらに、それ以後、意図的な伝達行動において、伝達の対象としての「人」と、伝達の内容としての「物」の分化がはっきりみられるようになると考えられる。

なお、その点について、結果の章にはあげなかったが14・15か月で、〈手・腕による伝達(その他)〉と、〈つかむ・物(I)〉の共起が多くみられた( $p < .05$ )。これは「物」をつかんでいる時、意図的な伝達行動が行われていることを示しており、典型的には「子どもが母親に自分の持っている物を渡す」という行動としてあらわれる。

以上「人」と「物」の関係を発達的に検討してきたが今後、さらに、言語行動の成立における「人」「物」の機能について、エピソード記録を用いて詳細に検討を行うことが必要であろう。

### 3. 伝達行動の発達

前言語的な行動による伝達から、言語による伝達の成立までに、子どもはどのような手段でどのような内容を伝達していくのか。ここでは、伝達の形式と機能の主な発達傾向を示す。今回のデータ分析により、伝達の発達について、次の3段階が認められた。

#### a. 意図のない伝達

最初、子どもの行動には伝達意図はなく、生理的欲求に基づく感情の表出や、内的、外的刺激によって喚起された行動があるだけと言える。この段階では、母親は刺激とは成り得ても、子どもの行動が向けられる対象ではあり得ない。

しかし、母親の側からは、たとえ無意図的行動であっても、子どもの泣き声や、手の動き、視線、遊び的喃語は、意図を持つものとして解釈される。つまり、子どもの行動は、大人のように目的のある行動と理解され、その目的を果たすために母親に伝達しているとさえ解釈される。このような、母親の側からの一方的理解によって子どもの行動は伝達の枠組の中にはめこまれ、結果として伝達の効果を持ちうる。

この時期は、主に2・3か月にあたる。母親のことは、どの月齢でもほぼ一定量あるが、それは、この時期でも、子どもの意図の読みとり(〈説明・ini〉)、許容(〈肯定言語〉)、子どもに大人のような目的のある行動を行なわせようと誘いこむこと(〈行動喚起〉)などが行なわれていることを示している。また、遊び行動の誘導の量に月齢差がないことも母親がはやくから、目的のある行動のひとつである遊びという行動に、子どもを誘い込んでいることを示している。このような、母親の側からの、意図的行動への誘いが、子どもにとって、次の段階への

強力な推進力となっているのだろう。

#### b. 形式のない伝達

次に、子どもの行動に明らかに伝達意図の認められる段階が来る。子どもは、様々な行動によって母親をはじめとする大人に自分の内的感情を訴え、何かを要求し、ひいては、自分以外の物、事象に大人の注意を引く。この時期の子どもが伝達の形式として用いる行動は、子どもに可能な行動の中では、比較的一貫して伝達のために用いられているが、その文化内の人々に一般的に共有されている形式（言語、指さし、首の振りなどの行動）ではない。その行動は、結果に示した初出時期、頻度の増減、安定化などから、伝達形式としての役割が認められたもので、発声、視線、表情、手・腕の活動である（以下の説明では、例としてエピソードを補っておく）。

発声は、人に向けられた、泣き、むずかり、原初語である。これらは、文脈の中で、明らかに伝達機能を果たしている（例：母親に抱かれてむずかっていたが、母親がミルクを取りに行くことになり、もどって来る足音がするとまたむずかる）。

視線は、それだけでも有効な伝達形式であるが、首の定位、身をねじることを伴うことによっていっそうその機能を発する。最初は、ただ母親の顔を見ることで、母親の行動を引き起こすことができる。さらに、母親を見た後で、他の物を見ることにより、母親の注意をその物に向けられることができる。また、物に対する操作などを行なった後で母親を見ることにより、母親の行動（承認、説明など）を促すこともできる。

表情としては、笑いによって承認を示し、好ましい母親の行動を続けさせたり、不快な表情や、顔をそむけることによって、母親の行動を阻止したりできる。

手や腕の活動としては、リーチングや物にさわることによって、その物を取ってもらったり、操作してもらったりすることができる。また、物をさし出すことによって、相手に受け取らせたり、その物に注意を促すことができる。

以上、個々の伝達形式と機能について述べたが、相関による分析からわかったように、子どもがこれらの形式を用いる時には、個々の形式が単独で伝達機能をもつことは比較的少なく、たいてい2つ以上の形式が様々な組み合わせで用いられている（例：母親を見ながら発声する。手でスプーンを押しやりながら不快な表情で食物を拒否する）。大人の伝達行動にも、この種の冗長性はある、異なるモダリティの行動をうまく組み合わせ、効果的な伝達を行なっている（話しかける時に相手を見たり、返事と共にうなづいたり、物を取ってもらうために物に注視し、指さしたりする）。このような、大人の伝達行動

に基本的な傾向が、伝達意図の出始めたところからすでに備わっている。しかし、子どもにおける冗長性は、伝達を有効にするという働きの他に、次の様な役目があると思われる。それは、伝達の機能と形式の関係を強化するということである。例えば、母親を見ることは、母親の注意を得るという意味で、比較的初期から独立して伝達機能を持っているが、それとむずかりが共に生ずることが多いと、むずかりが単なる表出から、母親に向けられた伝達形式になり、不快を母親に伝えるという機能を果たすようになる。以後、母親を見ることを伴わなくとも、むずかりは、伝達の形式として、その機能を果たし続けるようになると思われる。このようなことは、新しい伝達形式とその機能の出現のために、既存の形式と機能が重要な役割りを果たすことを示唆する。

#### c. 慣習的形式による伝達

次に、社会的に認められた形式によって意図を伝達する段階が来る。14・15か月では指さしが見られるようになり、16・17か月ではさらに言語による伝達が多くなりこの段階に移行し始めていることを示している。

## V 今後の課題

本論文では、チェックリスト法による観察資料を用い、2か月から17月児とその母親の行動の分析を試みた。今回の分析は、チェックリストの各項目の頻度と2項目間の相関によって行った。今後、3項目以上の共起関係を求めることにより、母子の行動パターンを、より明確にしたい。

さらに、エピソード記録を用いて以下の点を質的に明らかにする。第一に、頻度分析から得られた、各行動の発達の変換点における質的变化。第二に、考察で述べた伝達行動の発達の各段階に関する詳細な分析。第三に、母親について、今回明らかにし得なかった、ことばかけの内容の分類とその変化を明らかにする。また、子どもとの伝達の具体的内容、子どもに与える物の詳細なども分析していく。

また、時間標本法を用いたチェックリストからは明らかにできない母子相互作用の継時的側面（例えば、ある行動をどちらが開始し、また終了するか、相互作用の継続時間）の分析もエピソード記録によって行っていく。

我々の観察研究は、8名の子どもが2歳になるまで続けられる予定である。この追跡研究では、今回のように子どもの発達の一般の傾向を明らかにできるだけではなく、男女差や個人差を、発達の異時点と比較することが可能になることから、言語習得を規定する要因を追究す

ることが容易になってくるであろう。

(指導教官 肥田野直教授)

#### 文献

- 1) Bates, E. et al. (1976) Language and context. The acquisition of pragmatics. Academic Press.
- 2) Bruner, J. S. (1975a) From communication to language. A psychological perspective. *Cognition*, 3 (3), 255-287.
- 3) Bruner, J. S. (1975b) The ontogenesis of speech acts. *J. Child. Lang.*, 2 (1), 1-19.
- 4) Bruner, J. S. (1978) Learning how to do things with words. In Bruner et al. (eds.) *Human growth and development*. Oxford Univ. Press.
- 5) Clarke-Stewart, K. A. (1973) Interactions between mothers and their young children: characteristics and consequences. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 153, Nos. 6-7.
- 6) Dore, J. (1975) Holophrases, speech acts and language universals. *J. Child. Lang.*, 2 (1), 21-40.
- 7) Lewis, M. M. et al. (eds.) (1974) The effect of the infant on its caregiver. Wiley.
- 8) Lewis, M. M. et al. (eds.) (1977) Interaction, conversation and language. Wiley.
- 9) Macnamara, J. (ed.) (1977) Language learning and thought. Academic Press.
- 10) Moerk, E. L. (1977) Pragmatic and semantic aspects of early language development. University Park Press.
- 11) Snow, C. E. et al. (eds.) (1977) Talking to children: Language input and acquisition. Cambridge Univ. Press.
- 12) 津守 真その他 (1962) 「乳幼児精神発達診断法」大日本図書。

付記 1. この研究をすすめるにあたり、非常に多くの方々のお世話になりました。とりわけ、進んで協力をしてくださった被験児のお母様方と御家族の皆様に、この機会にあらためて御礼申し上げます。また計算については東京工業大学大学院生関根裕氏に御協力いただきました。記して感謝いたします。その他、VTR 撮影や資料の整理に関して御協力くださいました皆様にも御礼申し上げます。

付記 2. この研究の計算は東京大学大型計算機センターで行なわれた。

付記 3. この研究は、昭和 52, 53 年度文部省科学研究費(一般研究 B, 代表者肥田野直)の補助を受けた。